



二人の眠り姫

暁の天使たち 4

茅田砂胡

Sunako Kayata



立ち読み
専用



D 挿 口
T 画 絵
P

ハ 鈴
ン 木
ズ ・ 理
・ ミ
ケ 華

1

つくづくドジを踏んだものだと思う。

あの程度の爆発を避けることができずに身動きもならない大怪我^{けが}を負うなんて、昔の知人が聞いたら腹を抱えて大笑いするに違いない大失態^{だいて}だ。

以前の自分ならこんなへまはしなかっただろうに、いよいよ老いぼれたかと自嘲^{じちょう}気味に笑っていると、すぐ近くで相棒の声があった。

「断っておきますけどね。あなたの身体能力数値は年齢を考えると異常なほどのよ。あなた一人なら、あんな爆発に巻き込まれたり決してしなかったとわたしは断言するわ。あなたが助けに戻った二人が

信じられないのろまだったというだけよ」

おや？　と思つた。

耳で聞いたような声ではなかったからだ。

この相棒とは自分の右眼に仕込んだ義眼を通して繋が^{つな}がっている。だから、自分に何かあれば相棒にはすぐにわかるし、自分の意志を伝えることもできる。

しかし、生身の人間である自分は、相棒の声を耳以外の器官で聞き取ることは不可能なはずだった。

何より、あの爆発の威力では、その義眼も無事であつたとは到底思えない。

こりゃあ死ぬなど、爆風に吹き飛ばされながら、他人^{ひと}事のように冷静に考えていたくらいだ。

さてはあの予想通りに、自分はもう死んだのかと思つたところへ、さらに相棒の声が重なつた。

「いいえ。まだよ。あなたは意識不明の危篤^{きとく}状態に陥^{おちい}つていろの。おかげで病院もマスコミも大騒^{さわ}ぎしてるわ。——わたしの声が聞こえたら眼を開けてちようだい。おもしろいものが見えるわよ」

ますます首を傾げる思いがしたが、実際に身体を動かして首を捻ったわけではない。あくまで意識の上でそういう仕草をしたと感じたまでだ。

何故と言つて、本当に意識不明の重体だとしたら、首を傾げたりできるはずがないからである。

半信半疑で、開かないはずの眼を開けてみると、そこには見慣れた宇宙空間があつた。

ただし、自分が飛んでいた実際の宇宙ではない。

色とりどりの星雲や無数の星が真つ暗な闇を埋め尽くすように、びっしりとひしめき合っている。

美しい眺めだった。性能のいい望遠鏡で捕らえた映像のような華やかな世界が広がっていた。

そして、宝石をちりばめたような銀河団を背景に、相棒の姿があつた。

「よう、どうした？」

我ながらおもしろそうな声になったと思う。

そこにいたのは間違ひなく見慣れた相棒だった。

誰が見ても魅力的だと言うに違ひない美しい顔に、

長い金髪、表情豊かな青い瞳。加えて、この相棒はなかなかおしゃれで、見る度に服装を変えている。

今は白い豊かな胸を強調するような黒のドレスを着ていた。それだけなら別に驚くことでもないが、今の彼女は全身を見せていたのである。

胸元を大きく開けた黒のドレスは見事にくびれた胴から腰へ流れて膝の下まで続き、ひらひらと裾が揺れている。手触りのよさそうなやわらかな生地は、その下にすらりと伸びた脚線美を強調していた。

小さな足には黒のハイヒールを履いている。

思わず、まじまじとその姿を眺め回した。

確かに珍しかった。長いつきあいの相棒だったが、こんな姿を見るのは初めてだ。

相棒はいつも通信端末画面の中に現れる。つまり、二次元である平面の中だ。それ以外のところでは見たことがないし、現れるはずもない。

若い女の姿をしてはいても、相棒には実体はなく、眼に映るのは合成された映像にすぎないからだ。

しかし、今は違う。いつも見ている画面の姿とは明らかに違っている。実に立体的で、肉感的ですらあった。本当にそこに実体が立っているようだった。「こりゃあ、新車の立体映像か何かか？」

「そう見えているだけよ。今のあなたはアレنج・マシんに接続されているような状態にあるの」

「馬鹿言え。俺にはあんな機械は使えないぞ」

そう言いながら、手を伸ばしていた。

初めて見る立体的な相棒の姿が珍しかったのだが、伸ばした自分の腕や手が視界に入った。

意識だけの存在にしてはよくできている。

そればかりか、自分の指先は相棒の顔の周りを縁取る金髪を実際にすくうことまでできたのである。

その感覚がおもしろくて、興味深げに指を絡めてみた。

「――驚いたな。どうしてさわれるんだ？」

「それはね、あなたの意識が、今までに触れた女の人の髪を思い出して、ここにはこういう感触があ

るはずだと判断しているだけよ。知ってるでしょ？ わたしには肉体がないんだから。もちろん髪の毛や皮膚もない。ないものに触れることはできないわ」

つまり、さわっていると思いこんでいるだけだと、単なる錯覚であると言いたいらしい。

それでも、減多にできない体験には違いなかった。しなやかな髪の一房をもてあそびながら言った。

「この髪、最初は栗色だったんだよな」

「あら、そうだった？」

「そうさ」

髪を離して、今度は白い頬をなぞってみる。

すると、相棒はその動きに反応してちよつと笑い、くすぐったそうに肩をすくめてみせた。

錯覚とは思えない感触だった。うなじに触れると、拍動まで感じ取れるような気がした。この相棒には心臓も血の流れもないというのだ。単なる錯覚と言うにはできすぎていて、首を傾げて呟いていた。

「わからんな。これは俺がそうあって欲しいと思う

願望なのか？」

「わたしが生身の女だったらよかったのに、なんて、あなた、思ったことがあるの？」

「いいや。それだけは断じてないぜ。生身の女ならいくらでも代わりはいるが、おまえの代わりなんかどうかを探してもないからな」

きつぱり言うのと、相棒も笑って手を伸ばしてきた。きれいなマニキュアの指で自分の頬に触れ、髪を撫で^なてくる。これも考えてみれば変な話だった。

今の自分に肉体はないのに、意識だけの存在だというのに、皮膚をなぞる指の感触がわかるのだから、相棒も同じことを思ったに違いない。まじまじとこちらの顔を覗^{のぞ}き込んできた。

「不思議ね。アレンジャーの意識に『触れた』ことなら何度もあるけど、まさかこんなふうにあなたの意識にさわれる時が来るとは思わなかったわ」

「俺もさ。——なあ。おまえからは、今の俺はどう見えてるんだ？」

「あなたはあなたよ。初めて会った時からずっとね。少しも変わらない」

断言されて、ちょっと笑ってしまった。

「そんなはずはないぜ。おまえと初めて会ってから、何年になると思ってる？」

「さあ？ 忘れちゃったわ。五十年以下ってことはないでしょうけど——どうでもいいことよ」

この相棒に限って忘れたりするはずはないのに、そんなことを言う。

「おまえが変わらないと言ってるのは、操縦技術のことだろう？」

「それだけじゃないわよ。人格のことでもあるわ。

操縦者の思想の変化は操縦技術には関係なくても、『どんなふう^にに船を飛ばすか』という判断に比較的大きな割合で影響してくるのよ。わたしにとっては無視できない要因だわ。それ以外の部分、たとえば外見の変化はわたしにはあまり意味がないのよ」

どんな船よりも速く巧みに飛ぶという至上命題を

掲げる相棒らしい台詞である。

「あなたはわたしの知る限り、最高の操縦者だった。昔も、今も、そして多分、これからね」

「ぜひともそう願いたい、いい加減にこの状況を説明しろよ。おまえが何かやったのか？」

「やったのはわたしじゃないわ。あの人よ」

相棒が示した方向を見ると、宝石のような星雲を背景にして、天使が立っていた。

それで何もかも腑に落ちた。

相棒に比べれば、まだまだつきあいの浅い——と言つても関わり合い方の度合いはずいぶん深い黒い天使は、まっすぐ自分を見つめていた。

この空間がどういう性質のものかは不明だが、存在に気づいた途端、天使の姿は目の前に来ていた。長い黒髪が揺れて、煌めく星雲の一部を覆い隠す。そうやって立っていると、この天使はまるで夜を統べる者のようだった。煌めく星々も銀河も、この天使の前に存在を譲っているように見えた。

「俺を迎えに来たのか……？」

問いかけると、天使は真顔で頷いた。

「ええ。来たわ。約束だもの」

その時々で性別を変えてしまう無節操な天使は、今は女性の身体だった。どちらでいても充分に美しいが、自分は男なので、女の姿でいてくれるほうが、はつきり言つて嬉しかった。

「俺は死ぬのか？」

天使はもう一度頷いた。

「あなたは重体なの。あの傷ではとても助からない。まだ生きているのが不思議なくらいなのよ」

「そうか……」

不思議とさばさばした気分だった。

わかつていたことでもあった。いよいよその時が来ただけのことだ。そう思つて相棒に眼をやった。

「それで？ おまえはどうしてここにいるんだ？」

「あなたに言つておきたいことがあったから、この人につないでもらつたの」

「つないだ？」

「そうよ。ただ、あなたはアレنجジャーではないし、わたしにとつてもアレンジ・マシンなしの精神接続なんてこれが初めてですからね——まさか、本当にできるとは思わなかったわ。参考までに、どういふうにしたのか、訊かせてもらえる？」

問いかけられて、女の姿の天使はちよつと困つたように肩をすくめた。

「あたしにはあんな機械は——アレンジ・マシンは使えない。人工知能の意識と人間の精神を接続するなんてことはできない。できるのは、あたし自身の力を使って、人の心と心を結びつけることくらいよ。だから、嘘^{うそ}みたいだけど——こんなの絶対無理だと思つただけど、やってみれば何とかなるもんね。まさか本当にできるとは思つてもみなかった」

他人事^{ひとこと}のように言わないでもらいたいが、天使は相棒の姿を見つめて真面目に頷いた。

「前から思つていたけど——あなたは機械であつて

機械ではない。何故かはわからないけど、心がある。だからでしょうね」

「あなたにお礼を言うわ。天使さん」

相棒もいたずらっぽく天使に微笑^{ほほえ}み返した。

その眼が再び自分を見つめた時は、ひどく真剣な光を湛^{たた}えていた。天使がいみじくも言つたように、機械のものととても信じられない瞳^{ひとみ}だった。

「わたしもあなたにお別れを言いに来たのよ」

「大げさだな。俺たちは何もこれが永遠の別れつてわけじゃないだろう？」

わざとからかうような口調で言つた。

自分にはまだやらなくてはならないことがある。

たとえ肉体が死んでも、ここで終わるつもりはなかった。相棒もそれはよく知つているはずだったが、あくまで真面目な顔で首を振つた。

「そういう意味じゃないのよ。あなたが眼を覚ます時まで、わたしも眠ることにしようと思つているの。操縦者のいない船が動いていても仕方がないもの」

さすがに驚いた。初めて目の当たりにする相棒の、実体ぎようしとしか思えない顔を凝視した。

「それは、おまえ自身を機能停止状態にするという意味か？」

「ええ」

既に決めてしまった口調だった。

どんな船よりも速く巧みに飛ぶという目標を持つ相棒にとって、この先何年わたに亘るかわからない機能停止は恐ろしく大きな不利益になる。そこまでする必要はないと言いかけたが、結局、口をつぐんだ。

この相棒とは本当に長いつきあいになる。

その間、どんな時も相手の意思を尊重してきた。

それが自分たちの流儀だった。

何より、自分はここで死ぬのだ。一人で残される相棒にしてやれることは何もない。

手を伸ばして金髪どろの頭を抱き寄せた。

まったく錯覚とは都合のいいもので、抱きしめた身体からだの温かさまでが感じ取れるような気がした。

「——約束するぜ。いつとははっきり言えないが、必ずおまえを迎えに行く」

「いいえ、その時はね、あなたではなく、彼女に起こしてもらふことにするわ。あなたが起きるのは順番で言ったらその後よ」

だから、わたしが彼女と一緒にあなたを起こしに行くわと相棒は言ったが、自分は首を傾げた。

「あいつに起こしてもらふ？ どうやってだ」

「実はね——こんなふう考えてるの」

相棒の示した再起動条件を聞いて、自分も笑って頷いた。

「いい案だ。俺があいつにくれてやれるものと言アイディアつたら、おまえくらいだからな」

「でしよう？ わたしはずっとあなたの船だった。

あなたはここで死ぬ。でも、彼女はまだ生きている。妥たとう当な措置だと思っわ」

「しかしだ。俺のほうが先に起きるかもしれないぜ。この天使次第だけだな」

黒い天使は話の流れが呑み込めない様子だったが、この言葉には反応して頷いてきた。

「ええ、あたしはそうするつもりよ。あの仕掛けを組んだあなたたちには申し訳ないけど、あれを使うのは、あたしはいやなの。反対なのよ」

「実を言えば、わたしもそうよ」

相棒はあつさりと同意して、離れていった。

「じゃあね。また会う時を楽しみにしてるわ」

笑って手を振ったのが最後だった。寶石のような宇宙空間から相棒の姿が一瞬で消えた。恐らくは、これが『接続を切った』ということなのだろう。

知らず、小さな苦笑が洩れた。

自分自身の半分がなくなったような気がしたのだ。相棒も同じことを感じたのかと思うと、なおさらほろ苦い笑いが洩れる。

そんな様子を気づかたらしく、天使が、そっと自分の顔を覗き込んだ。

「どうする？　もう……眠る？　それとも、どこか

行きたいところがあるなら、案内するけど……」

「ありがたい。ぜひ頼むぜ。一度、映像じゃなしに孫の顔を見てみたかったんだ」

「でも、見るだけよ？　会うことはできないのよ。

今のあなたの姿は普通の人には見えないんだから」

「充分だ。——なあ、天使。どうせなら、おまえの相棒も見せろよ」

そう言うと、天使はきょとんと眼を見張った。

ちよつとためらった様子で言ってきた。

「だけど、やっぱり、会わせることはできないのよ。見るだけになるけど……それでもいい？」

自分は笑って頷いたと思う。

「いいぜ。おまえがずっと待ってた『運命の人』を生きているうちにこの眼で見ておきたかったのさ」

2

男は《ダイダロス・ワン》をよく知っていた。

それも当然で、この巨大な秘密基地本体の設計に始まって、内蔵する兵器や精密機器の製造、さらに小惑星帯への実際の設置に至るまで、男の経営する無数の会社が密接に関わっているのである。

完成後は連邦の計らいにより、密かな招待を受け、内部を見学したことすらある。

と言つても、連邦側も機密保持上、洗いざらいを見せてくれたわけではない。重要な区域については『ここから先はご遠慮ください』とやんわりと拒絶してきたし、男もその時は素直に引き下がった。

しかし、実際のところ、男は内部職員の誰よりもこの宇宙要塞ようそくえいについて詳しかった。

外部構造はもちろん、施設内のどの部分にどんな部署があるのか、そしてそこではどんな仕事をしているのか。実際に働いている人間でも中央管理室に所属する者しか知らないはずの部外秘情報や最高機密に至るまで、相棒に調べさせて頭に入れていた。

加えて、基地内のすべてを管理する中枢管理脳に密かに接触した上、自分自身の個体情報を最上位に優先づけておいたのである。

もちろん、連邦はこの事実を知らない。気づいていたら猛抗議してきたはずだ。

こんなことをしたのはこの要塞を乗っ取るつもりだったわけでも、操るつもりだったわけでもない。

ただの茶目いたづらつ気だった。悪戯いたづらと言つてもいい。

連邦という巨大組織が——正確にはそこに属するVIPと称される人間たちが——いかに大仰おおぎように、攻略不可能な要塞をつくつたと胸を張っているのが

おかしくて、ちよつと悪戯氣を起こして、ご自慢の秘密基地の急所をこつそり抑えてやったまでだが、何が役に立つかわからないものだ。

おかげで、今の自分は自由に要塞内部を歩ける。中央制御室を出て生理学試験室へ急いでみると、イカロスVの警告が行き届いていて、そこは既に無人になっていた。

名称が名称だけに、その部屋には生ぐさい臭いが立ちこめていた。いくら消毒しても空調を整えても、どうしても隠しきれない死の臭いだ。

壁の一面が全部、透明なつくりになっていた。

透き通つたその壁の向こうに薄い青に光る液体が満たされ、そこに本物の人体解剖見本が並んでいた。ひととき目立っていたのが、頭以外のほとんどがそろっている死体だった。顔の上半分——鼻の少し上から頭部にかけてが全部、鋭利な刃物ですばつと切り取られたようになってゐる。当然、眼球もなければ頭蓋骨も脳髓もない。

それなのに、その死体はまだ生きていた。

臓器を生かすための器具が無数に装着されており、大きく開かれた胴体の中で心臓が脈打っているのが見える。腕の肉も開いて筋肉や神経が見えるようにしてあった。時折、何かの刺激を与えているのか、指先がぴくりと動く。

男は顔をしかめた。

どんな目的があつてしていることかは知らないが、お世辞にも楽しい眺めではない。

そして、寒々とした部屋の中央、解剖台の上に、侵入者の死体が置き去りにされていた。

まだ少年と言つてもいいほど若い、ほっそりした肉体だった。人によつては、冷たくなっているのが惜しいとも言うだろう。今では単なる器物となつたそれは、剥き出しのままぽつんと放置されていた。

男は足早にその死体に近づいた。首に手を這わせ、瞳孔を開いてみたが、脈はない。身体はひんやりと冷たく、瞳孔も開ききつてゐる。

間違はなく死体だった。

誰が見ても同じことを言うだろうが、男は死体の黒い髪を優しく撫でると、軽く頬を叩いて、そっと問いかけてみた。

「——おい、聞こえるか？」

答へはない。当然だ。死体が答えるわけがない。

しかし、こんな状態にあっても、この相手はまだ死んでいるわけではない。

男はそれをよく知っていた。

蘇生^{そせい}させるための方法も知っていたが、ここでは具合が悪い。再び内線に話しかけた。

「イカロスV^{ファイヴ}。現在、この基地に隠匿^{いんとく}性能を持つ機体はどのくらいある？」

「戦闘用、探査用、合わせて十五機が第三格納庫に収容されています」

「そのうち単座の戦闘用は何機だ？」

「AU72型が三機です」

「最新型だな。製造年度は？」

「九十年です」

「それ以前の型式——厳密には八十六年以前の型と比べて性能や操縦法は具体的にどう違う？」

問いかけられたイカロスV^{ファイヴ}は旧型機と比較した性能の違いを淡々と説明して、操縦方法については、それほど大きな変更はありませんと言ってきた。

それだけ聞けば充分だ。

実験台から死体を抱き上げようとした男だったが、そこで手を止めた。全裸死体を担いだまま基地内を練り歩いたのでは、いかに何でも怪^{あや}しすぎる。

何かくるむものはないかと室内を探したところ、格好のものを見つけた。事故現場などで死体を包む遺体袋^{ボディバッグ}だ。この部屋には絶対に必要な備品である。

もつとも、この部屋から出る死体が人間の原型をとどめているとは思えなかった。まともな死体でも、最終的にはばらばらにされているはずだ。用済みになった検体进行处理するために使っているのだろうか、これぞ本来の利用法というものだ。

男は息のない身体を遺体袋に収め、開閉テープを止めたが、その顔が隠れる時、ちよつと手を止めた。「まったく、何をやってるんだ、おまえ……」

答えないとわかっていても、思わず声になった。

笑いの混ざった眩きだった。

「人を叩き起こす時は事情くらい説明するもんだぜ。――後でちゃんと話してもらうからな」

同じ頃、《ダイダロス・ワン》の主貨物庫メイン・ハッチに中型輸送船が到着していた。

どんなに防衛機能の高い要塞でも、そこに人間が暮らしている以上、補給はどうしても必要になる。

しかし、《ダイダロス・ワン》は公式には存在しないことになっている施設だ。

当然、人や物資の流れも秘密にする必要がある。

この輸送船の正体は、惑星セントラルの軍閥連施設から出航した軍用貨物船だった。連邦本部であるセントラルは、共和宇宙の国の中でもっとも船の

運航に厳しい惑星の一つだが、この貨物船の出航は極秘に行われ、記録もいっさい残らない。

大量の物資の積み降ろしや、人員の交代手続きのため、主貨物庫は一時的に騒がしくなっている。

その貨物庫の片隅に《ダイダロス・ワン》の警備員になりましたリイとシェラが出現していた。

連邦大学惑星から数百光年の距離を一瞬に飛んで、まったく見知らぬ場所に送り込まれたのだ。普通の人間なら（こうなることがわかっていても）多少は動揺どうようするものだが、リイもシェラも落ち着き払って、さりげなく辺りに眼を配った。

自分たちのいる場所はコンテナの陰になっている。すぐそこに大勢の人の気配があるものの、実際に見咎みとがめられた様子はない。そう判断した二人が真っ先にしたことは、自分たちが何を持っているのか、装備を確認することだった。それすら行う暇もなく、この場所へ『転送』されてきたのである。

内懷を探っていたシェラが妙な道具を見つけた。

鞆^{かばん}の取っ手部分だけのようなものだった。同じ形のもので二つ重なっている。最初は拳^{こぶし}にはめて相手を殴るものかとも思ったが、それにしては甲^{こう}に当たる部分の強度が弱く、見るからに薄い。

握りの部分には何かスイッチらしきものがついてた。二つ重なっているということは両手に握って使うのかとも思い、シエラはそれを一つずつ両手に握って引いてみた。

すると、離れた取っ手と取っ手との間に細く光る鋼^{はがね}の糸が伸びた。ちよつと見ただけでも切れ味の鋭さがわかる糸状の刃物だった。握りのスイッチを押すと、糸はするりと本体内に収納された。

仕掛けも形状も異なっているものの、その用途は見れば明らかだった。

こんなところで慣れた道具に出くわしたシエラは半ば驚き、半ばおもしろそうに言ったのである。

「この世界にも銀線^{ぎんせん}があるんですね」

「ああ、鋼^{はがね}の糸鋸^{いとのこ}だ。軍隊ではよく使われてる」

リイも持ち物検査に余念がなかった。腰と上着の内側に無反動式の銃が一丁ずつ。胸ポケットに眼を保護するための眼鏡^{ゴーグル}と刃の厚いナイフが一本、左手首に通信機。さらに格好のものが腰に下がっていた。

ちよつと見には剣の柄部分^{つか}だけのように見える。

事実それは機械仕掛けの剣だった。柄の片方にも両方にも刃を出せるビーム・サーベルだ。

現在、大勢の人が集まる大規模な施設では銃器の使用制限が行われている。警備装置^{いちじる}は年々著しい進歩を見せ、銃器類の不法な持ち込みはほぼ完璧に阻止できるようになっている。さらには保安上の理由、及び安全上の見地から、エネルギー系の銃器の使用そのものを不可能にする制御装置も導入されている。

そうなれば肉体を使った格闘技や、こうした古典的な武器を使った武術が重視されることになるのは当然の成り行きだった。

中央銀河で棒術^{そう}や槍術^{そう}と言った武術が盛んなのも、

一つにはそのせいである。

今は柄の部分しかないサーベルの重みを確かめて、リイも不敵に笑った。本物の剣とは比べものにならないが、慣れている道具だった。

二人は制帽を被りなおし、何食わぬ顔で基地内に入り込んだ。職員とすれ違うこともあったが、警備員の服装をしている二人はまったく疑われなかった。こういう潜入行動なら、シエラにとってもリイにとってもお手の物である。

現地の人間に異物と思われないように、最初からここにいる人間であるように自然に振る舞いながら、足を運ぶ。その目的地がどこなのかは自分たちにもわからないが、デモンから手渡された装置を頼りに、悠然^{ゆうぜん}と通路を進んで行った。

同じ頃、中央制御室でも騒ぎが起こっていた。

何度呼びかけても応答がないことを不審^{ふしん}に思った他部署の人間が上司に報告し、報告を受けた上司も

確かに室内で異変が起きていると判断し、最後には局長級の幹部職員^{クラス}たちが集まって協議した結果、極めて異例ながら緊急暗証を使用することで合意し、ようやく制御室の扉を開けたのである。

ところが、入ってみれば、そこでは職員が全員、床に倒れていた。

皆、気絶しているだけで息はしていた。しかし、息を吹き返した彼らの証言によって侵入者の存在が明らかになったのだ。

これで騒ぎにならないほうがおかしい。

その侵入者は堂々と扉から現れたという。

彼らは真つ先に入室記録を調べた。中央制御室へ入室する際は必ずその時間と、入室した人物の氏名、認証が記録されることになっている。

ところが、確かに侵入者が通過したはずなのに、その記録はなかった。

入室記録の中で一番新しいものは、その侵入者に気絶させられた制御室内の職員のものだったのだ。

「イカロスV。正式な認証もない者に、なぜ中央制御室への入室を許し、室内での発砲を許した？侵入者の現在地は？」

ところが、『ダイダロス・ワン』の保安局が誇る、つまりは連邦最高の性能を誇るはずの中枢管理脳は、あつさり答えたのだ。

「侵入者は存在しません」

「なんだと？」

責任者は耳を疑った。もう一度、慎重に命じた。

「現在、当基地内に認証を持たない不審人物がいる。不正手段によって基地内に侵入し、制御室の職員を攻撃したその人物の現在地をただちに指示しろ」

そこまで詳しく言っても、答えは同じだった。

「当基地内に不審人物は存在しません」

というのである。

しかし、そんなはずはないのだ。現実には制御室の職員たちは弱い銃撃によって失神させられている。

ここにある装置はどれも非常に繊細なもので、

部屋全体を覆うように一種の力場を張り、銃器の使用を制限してある。

この室内で銃を撃つためには室内を覆っている力場を解除しなければならないが、それができるのはイカロスVだけなのだ。しかし、基地内の安全を管理する使命を持たされているイカロスVにとって、そんな行動を取ることは重大な勤務規程違反に相当する。

責任者が必死になってその点を問い質すと、『ダイダロス・ワン』の全機能を司る中枢管理頭脳は、「規定に違反した事実は、ありません。有資格者の指示に従ったまでのことです」

と反論してきた。

責任者は今度こそ絶句して棒立ちになった。

こんな信じがたい事態が生じた可能性は二つ。

一つはイカロスVの機能に何らかの障害が発生した——つまりは故障したということだ。高性能の管理脳にこんな故障が起こる確率は限りなくゼロに

近いはずだが、一応はその可能性を疑ってかかる必要があった。

もう一つはもつとあり得ない可能性だった。

考えるだに恐ろしい、考えたくもない可能性でもあったが、それは何と現実になったのである。

イカロスVの総点検に当たった技術者たちは、

この中枢管理脳は完全に正常に稼働しており、その機能に何ら異常は認められないと断言したのだ。

つまり、中央制御室に押し入り、職員たちを気絶せしめた『侵入者』は正式な身分と認証を所有して基地内をうろついていることになる。

それも銃器使用制限をやすやすと解除するほどの、上位の認証であることは間違いない。

この事実を突きつけられた保安責任者はそれこそ茫然自失の体に陥った。

外部操作は考えられなかった。構内には腕利きのアレンジャーが何人もいるが、イカロスV級の頭脳になると、不正な改変は受けつけない。しかも、

その痕跡をこうまで見事に隠すことなど不可能だ。

この報告を受けた保安局長も他の幹部も仰天した。気絶させられた中央制御室の職員がいなかったら、

彼らは絶対にそんなことは信じなかっただろうが、そこにはいやでも認めなくてはならない——決して無視できない現実があった。

その侵入者は正式な認証を持っている。つまり、『ダイダロス・ワン』に実際に在籍する職員である可能性が極めて高いことになる。

「馬鹿な!？」

到底信じられなかった。ここで働く職員はみんな思想や身元などを入念に調査した上、厳しい審査に合格した人間ばかりなのだ。

しかし、こんなことはあり得ないと喚いていても始まらない。

幹部級の職員たちは（彼ら自身も含めて）制御室入室の権利を持つ職員をすべて監視下に置くように手配すると、外部への昇降口を全面的に封鎖した。

さらには、正常に機能していることが証明されたイカロスV^{ファイヴ}を一般職員から隔離した。

中央制御室以外の場所からのイカロスV^{ファイヴ}への接触を全面的に禁止したのである。その上で各部署の責任者に点呼を命じた。

それもただの点呼ではない。

「全職員の作業を中断させて、部署に呼び戻せ」

という徹底したものだ。

《ダイダロス・ワン》で働く職員たちにはすべて、その職員の所属する部署がある。

つまり、席が決まっているのだ。

食事や休憩などで席を離れている場合もあるし、整備や営繕^{えいぜん}に関わる職員は出ずっぱりという場合もあるだろうが、非常呼集が出たら速やかにその席へ戻らなければならず、それが不可能な場合には、自分の居場所を正確に報告しなければならぬと定められている。

そうやって全職員を本来の持ち場に集合させれば、

必ず空席が出るはずだった。侵入者が何食わぬ顔で戻ってくる可能性は考えなかった。

何と言っても、中央制御室の職員たちは侵入者の顔を見て、その姿を確認している。これ以上はない生き証人である。

しかし、言い換えれば、それが逆に不気味だった。その顔はあらかじめ人に見せつけるためのもので、本来の顔とはまったく違うものなのか――。

何故、彼らを殺さずに生かしておいたのか、何故口をふさがなかったのか、いったいその侵入者は何者で、何が目的なのか――。

中央制御室に集まった幹部職員たちは皆、激しい焦燥^{しょうそう}と苛立ち^{いらだ}を感じ、眼を血走らせていた。

その不審人物が外部から侵入したわけではなく、身内に巣くっていた虫だとしたらなおさらだ。

何としても捕らえて、正体と目的を暴かねばならなかった。

生きたまま捕らえるのが理想的だったが、外部へ

逃がすくらいなら殺してでも捕獲するべきである。

彼らはまず保安要員を総動員させて点呼を取ると、基地内の徹底搜索を命じた。

その際、不審人物への発砲許可を与えることも忘れなかった。

生理学試験室に潜入して死体を担ぎ出した男は、第三格納庫内に入り込んでいた。

二メートル近い長身の男が遺体袋を担いで悠々と通路を歩いているのだから、目立つこと極まりない。

すれ違う職員たちの視線を一身に集めていたが、男の態度があまりにも平然としていたこともあって、表だって咎められることは一度もなかった。

こういう大規模な施設に共通して言えることだが、『この場所に侵入者なんかあるわけがない』という思いこみが人々の間に強く働いているのである。

その心理を逆手にとった男は呆れるくらい堂々と格納庫内に入り込み、目的の機体を探した。

肝心のAU72型の外見を男は知らない。しかし、見当はつく。広い格納庫の片隅に機体番号すら明記されていない真つ黒な戦闘機が三機、並んでいた。

操縦席に遺体を座らせて固定すると、男は機体の感応頭脳を呼び出した。何しろ初めて見る機体だからちゃんと飛ばせるかどうか今一つ自信がない。

こういう時は機本体に訊くのが一番手っ取り早い。もちろん、その機体の仕様を聞いたからと言って即座に使いこなせるかどうかは話がまったく別だが、男は呼び出した感応頭脳から提示された情報を元に、必要な動きを次々に設定していった。

入力事項が多く、少し手間取る作業だったので、さすがに変に思われたのか、足下から声が掛かった。「おい、何してる？ AU72はしばらく使わないはずじゃなかったか」

問いかけてきたのは整備員の一人らしい。

男は慌てず騒がず、作業を続けながら応じた。

「さてね。俺もよく知らん。何でも、人形ダミーを乗せて、

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。